

『夜桜ほろ酔いお姉さん　くきみといっしょに、乾杯したい』

特典シナリオ台本

【登場人物】

佐々倉 桂花（ささくら・けいか）

一人称「あたし」、「けーかさん」。

あなたを誘った酔っ払いのお姉さん。

愚痴を聞いてくれて、雑に相槌を打ってくれる。

親身なようできて他人事、かと思いきや、懐に入ってくる。

お姉さんの軽さが、あなたの悩みも軽くしてくれる。

《年齢》 27歳 《身長》 162センチ

《バスト》 D

あなた

この春、社会人二年目になった22歳。

頑張りたい。でも頑張り方が分からないかも。

社会人、大人の暮らしてどんなかんじ？

くよくよしがちなあなたの悩みを偶然出会ったお姉さんが軽くしてくれて、縁ができる。

この町での暮らしも二年目。

職場や社会人の立場に慣れようと必死だったから、まだ知らない場所が多い。

お姉さんに誘われるまで自分が飲酒に強い性質だと知らなかった。

《年齢》 22歳 《身長》 155センチ

《バスト》 C

【あらすじ】

あなたは、入社二年目の社会人。
新人が入ってきて、上下関係が複雑化しはじめる年。
自分が頑張っているつもりでも、頑張っているのかどうか、
客観的にはよく分からない。

ある日の仕事帰り。
駅のホームでひとりお酒を飲むあなたは、
酔っ払いのお姉さん・桂花と出会い、一緒に飲むことに。

桂花の気安い雰囲気につられ、悩みや不安を打ち明けるあなた。
桂花の相槌は雑で適当。それが不思議と心地よい。

翌朝起きると、あなたの部屋には桂花の姿が。
桂花はこたつで眠っていた。

桂花は昨晚泥酔状態に陥ったあなたを運び、介抱してくれたのだ。

こうして、あなたとお姉さん・桂花の縁がはじまった。

【EP01：夜桜プラットフォーム】

○場所：駅のホーム

駅のホーム。

ベンチに座ったあなたは、発泡酒の缶を手に持っている。

「（上機嫌な鼻歌） んん〜♪」

「（あなたに気付いて） ……ん？」

飲み会帰りの桂花、改札出口へ向かう途中。
ホームでひとりで飲んでいるあなたを見つけ立ち止まる。

「おねーさん。おねーえさんちょっと」

「って、あたしのほうがおねーさんだわ（笑）」

「こんばんわ〜。一人で飲んでんの？」

頷くあなた。歩み寄る桂花。

「いいなー。あたしも混ぜたっていい？」

「いやー、飲み会の帰りなんだけどさ、
ちょっと飲み足りなかったところで」

「どっか寄って飲み直そっかなと思ったんだけど」

「（ベンチに腰を掛けて） ……んしょ」

「ほらここ。隣の席空いてるみたいだし？」

「……?」

「へへへー、ありがとー」

「それじゃあ、よいしょっと……」

ベンチを立ち、自販機に向き合うお姉さん。

「(指差し選びながら)どれーにーしーよーおーかー……」

「(ボタンを押して)お前だーっ」

「よし。乾杯だ」

桂花は立ったまま乾杯。

「カンパイ。いえい♪」

「んく、んく……(お酒を飲む)」

「っはあー! (しみじみと)これだなあ……」

「おさけおいしい? ん、よきよき」

「(ベンチに腰掛ける)んしょっとお」

あなたの隣に腰かけた桂花。

「なに飲んでんの?」

「(ビール、と答えるあなたへ)ほーん……おやおや、お嬢ちゃん。それはビールではなく発泡酒だよ」

「ほんと。ラベル見てみ。……ね?」

「(お酒を飲みつつ)まーどっちでもいいけどねー」

「普段あんま飲まないの？」

「そーかー。そかそか」

「今日はどした？ 飲みたい気分になっちゃったん？」

「あるよねー、そういう日。ある。おねえさん毎日だわー」

「……（飲んでから）っはあ〜」

「……（ほろ酔い心地の一息）」

「あ。ねー見て、桜。いーい感じ」

「ここね、いいんだよ。知ってた？」

「咲いてるねー。見ごろだねー。映えてるねー、盛れてるねー」

「……（景色に酔いつつ）桜を着に酒を飲むなんて、風流だなあ？」

「『丁寧な暮らし』ってかんじ……（お酒を飲み、息を吐く）」

「って、丁寧な暮らしは違うよなー？」

「はあ〜（一息つく）」

「……ここで桜見ると、一年早いなーって思うわー」

「もう、昨日は去年だったし、明日は来年かもしれない気持ち……ん？」

桂花、喋りながら自分が何を言ってるか、よく分からなくなってくる。

「まいいや」

切り替えて、あなたに寄り添い話かける。

「ねえねえ。きみ、歳いくつ？」

「わー、若っ。赤ちゃんじゃん」

「だめだぞー、赤ちゃんはお酒飲んじゃダメなんだぞー」

「（笑って）赤ちゃんじゃないか。うんうん、社会人に見える」

「女の子がこんなところでひとりで飲んでたら、危ないよお？」

「変なひとに絡まれるよ」

「現にほら、今あたしに絡まれてるし」

「まあ犬に噛まれたと思ってよ。お気の毒さまだよ」

「……（お酒の缶を傾けて気づく）あ。おさけ（切れた）」

「んしょ（ベンチを立つ）」

隣接の自販機で酒を購入した桂花。
再びベンチに座る。

「ふいふ（タブを開け、飲む）……」

「なーに。仕事帰り？ あ、就活とか？」

「あー。二年目なんだー」

「ってことは去年は新卒ちゃんなんだ。えらすぎー」

「えらいよお。えらいえらい」

「いやー、入社してるだけでえらいね」

「昼間からお酒飲まないんでしょ？ えらいよ。うりやうりや」

あなたの頭を撫でる桂花。

「そんでー？ 二年目が始まったばかりでー？」

「あれなかんじ？ なんかやなことあっちゃったかんじ？」

「えー、おしえておしえて。聞きたーい」

「うん、うんうん……ふんふん」

「ふーん、ふんふん……（お酒を飲みつつ相槌）」

「あれだねー。それは、あれだ」

「クラッシャーだね」

「違うな。なんだっけ」

「あー、プレッシャーだね」

「うんうん。いろんな悩みがあるよねえ」

「（適当に）わかるわかる。（お酒を飲みつつ）うん、わかるー」

「はー……えらすぎ〜。100点」

「でも実際入社してるだけでえらいよ」

「あたしもバイト先の後輩ちゃんが、入って二日目にもう来なくなっちゃって」

「連絡もつかなくてびくっくり」

「ビビるよねー。まあ、いんだけどね別に」

「んでねー、その子、家近所だって行ってただけど……」

「なんかね、わりとよく見かけるんだわ」

「いやー、あの度胸？ 凶太さ？」

「見習いたいよね。生きるのにわりと必要かも」

「きみも見習うといいよ。うん。見習いなさい」

「だあいじょぶ大丈夫、どーにかなるって〜」

「（お酒を飲み干しながら、適当に）うんうん。ほんとほんと」

「だいじょうぶだいじょうぶ。（飲み干して）ぷはー」

「……おし、あたしが奢ったる」

二人、ベンチを立ち、自販機の前へ。

「それももう空き缶でしょ。ほらポイして」

「缶はねー、リサイクルの王様！ 環境にいいの、知ってた？」

「そー、いくら捨ててもまた再利用されるの」

「だからね、お酒って飲めば飲むほど環境にいいってワケ」

「エコよ、エコ」

「（何を言ってるのか分からなくなりつつ）……ん？ まあいいか」

「てわけで、徳を積むのと等しいので、飲みなさい」

「あっ。きみ、もしやあれか？ アルコール弱い人か？」

「弱い人は、ここまでです」

「これ以上はダメ。代わりにあたしがキミの分まで飲む」

「……お？ イケちゃう？ い〜ね〜、いこいこ♪」

「ほれ、選りな〜」

「いいよ〜、梅酒いいよ〜。なんでも飲みな〜」

「よし。それであたしは〜っと」

「これにしよ〜」

「（お酒を飲み）んん、これ美味し〜」

「うわ。季節限定じゃん。見てこれ」

「桜味？ 桜の味かはわかんないけどおいしい。甘い」

「や〜、季節限定はあたしやなんだよね〜」

「だってさ〜、限定だよ？」

「気に入ってリピっても、すぐ消えちゃうんだから」

「儂いよお。だから最初から手出さないでおくの、さみし〜から」

「あ〜でも飲んじやったじゃん……」

「ほらきみも飲んでみ、味見味見」

「道連れにしちやおう」

「（あなたが飲むのを見守って）……よおし」

「どうどう？ 美味くない？」

「ねー、定番にはなんないでしょー、『桜』だよー？」

「かーっ、好きになっちまったもんは仕方ない。もう一本買っとこ」

「きみも買う？ いいよいいよ」

「そーだ、このあとツマミ買ってさあ、公園とかで飲もうよー」

「桜とか、もっと咲いてんの。気分いいよ」

「なんかまだ愚痴あるっしょ？ そういう顔してるもん」

「この際だ、言っちゃえ言っちゃえ」

「今日はね、もうね、付き合うよ」

「おねーさんね、給料日だったし、きみも金曜日だろう」

「いーのいーの、任せなさい」

「ここだけの話、若者に奢って飲むお酒はね、美味いんだから」

「きみにもそのうち分かるっ」

「よーし、じゃあしゅっぱっだ〜」

フェードアウト

【EP02：こたつで寝落ちのお姉さん】

○場所…あなたの部屋

知らぬ間に自分の部屋で眠っていたあなた。
目を覚ますと、何者かの気配を感じ取る。

昨日一緒に飲んだお姉さんが、こたつで寝落ちしている。

「(いびき交じりの寝息) ……………」

「ん ……」

「…………んー…………あ、起きたあ？ おはよお」

「くあ (欠伸) ……」

こたつにもぐりなおす桂花。

「…………… (二度寝を試みる)」

寝起きの桂花は、かなりダウンなテンション。
おそろおそろ状況の説明を求めるあなた。

「…………んあ？ あー………… (欠伸)」

「やばい。寝てた…………ひとんちで…………」

「…………いや、ゆうべ飲み直したじゃん？ 公園で」

「なんか、あなたは、とても、すごく飲んだね？」

「覚えてる？」

桂花は思い出しながら、ぽつぽつと話す。

「あたしが話聞いているうちに、すごいあの、あれして」

「ヒートアップ」

「してたねえ〜……」

「で、飲んで……」

「（思い出して笑う）人が景気よく飲んでるの見るのおもしろ……」

「（呟く）楽しい」

「楽しくなっちゃって、あたしもつられて飲んで」

「あなたは先に潰れて」

「あたしがなんとか道順聞きだして、ここまで運んだ」

「べろんべろんだったから、とりあえず水飲ませて……」

「（あくびをして）お布団のなかにぶちこんだのまではよかったんだけど」

「そこであたしも力尽きて、ごらんのありさま……」

「やー……飲んだ飲んだあ（しみじみと）」

「（切り替えて）じゃ、飲むか」

「ほら、昨日ホームで買ったやつあるじゃん、桜のお酒」

「え？ ダメ？」

「あ、そっか。ぬるいもんね？ まず冷やさないと」

「冷蔵庫に入れといてくれる？ これ」

「ありがとー、ふわぁ……」

「……(寝息)」

「(呼びかけられて) ……んー？」

「(眠気まぎれに) 起きてる起きてる、寝てない寝てない」

「あー、コタツっていいなあ……ぬくぬく……」

「あたしも家にこたつ欲しいけどさあ……」

「間取りと絶妙にハマらないんだよなあ……和室なのに……」

「和室なのにソファ置いたせいかな……」

「いいなあ……ここに住も……」

「……(寝息)」

こたつで眠る桂花をまたぎ、キッチンへと向かうあなた。

ケトルで湯を沸かし始める。

冷蔵庫を開け、桜の缶チューハイをしまう。
戸棚を覗いたり、食料を探す。

白湯をつくり、こたつまで運ぶあなた。

「ん……白湯、助かる。ありがとー」

「……んしょ」

桂花の向かいに座るあなた。

「いただきます。……(白湯をすする)」

「(しみじみと、温泉に浸かる雰囲気) ああああ……」

「生き返るう……はあく……」

「……………(落ち着いた吐息)」

「うん。目え覚めてきた」

桂花の受け答え、さっきよりもまともになっていく。

「いやー……ごめんねー？」

「初対面で家上がりこんで……結果的には泊まることに……」

「近所なんだけどね」

「惜しかった。あと一杯我慢すれば家に帰れたかも」

「あ、どうも。改めて、はじめまして」

「わたくし、佐々倉桂花と申します」

「昨日名乗ってた？ そーだっけ……」

「……あたしこのままここにいて大丈夫？」

「今すぐ帰ったほうがよければ、」

「(ごゆっくりとあなたに言われて)

あ♪ じゃあお言葉に甘えてちょっとだけ……♪」

「ふーい……(白湯をすする)……(息を吐く)」

「落ち着くう……」

「お嬢ちゃんは二日酔いへーき？」

「あとで来るかもだから、いっぱい水分とったときなー」

「あたしはまあ、ひどくなったらまた酒で中和するよ」

「（驚くあなたへ）え？ 効くよ？ 二日酔いに酒」

「迎え酒。効くよね？」

「あれ。迷信？ 民間療法的な？」

「でもまあ、思い込みでよくなるやつ？ それでやってくわ」

「そーそープラシーボ」

「あたしは信じる。信じる者は、救われる」

「信じるか信じないかは、あなた次第です」

「……あ、おかわり？ いーの？ ありがとう」

「どうもどうも」

「……（ごくごく飲む）」

「は〜〜……」

「……（落ち着いた吐息）」

「（適当なノリで）白湯ってなんでこんな美味しいんだろね」

「（心にもない調子で）お酒の百倍くらい美味しい」

「こんどまたいっしょに飲もうよ」

「きみは溜め込みそうだから」

「愚痴ならあたし、聞き流すの上手だし」

「有意義なアドバイスはできないけど」

「（冗談めかして）おねーさんの耳はロバの耳」

「話すだけでも、楽になるでしょ？」

「……（飲み干す）」

「はあく……」

「……よしっ」

立ち上がる桂花。

「それじゃ帰るわ」

玄関へ歩いていく桂花。

靴を履きながら、

「色々と世話になりました」

「（口調は軽くても心から感謝の気持ちで）ありがとね」

「またね」

ドアを開け、去っていく。

ドアが閉じる。

【EP03：お風呂は心の飲酒】

数日後。

○場所：あなたの部屋

金曜日の仕事帰り。

駅を出たあなた。

「お嬢ちゃん。おじょーちゃん」

後ろから声を掛けられ、振り返る。

「お、やっぱり♪」

「このあいだはありがとね」

「覚えてる？ うん、けーかさんだよ」

「偶然だねえ。まあ近所だからね」

「（来た道を指さしながら）あたしんちあっちのほう」

「このあいだは、ほんとにありがとね。

色々お邪魔しちゃって」

「あのあと気づいたんだけど、『また飲もう』って誘っという連絡先交換してなかったじゃん？」

「ねえ？ 社交辞令みたいになっちゃって」

「あたしは本気だったんだけど。迷惑じゃなければねー」

「お？ スマホあるよ、どうぞどうぞ。ほら、QRコード」

「個人情報、ゲット」

「へへ、悪用しちゃお。昼から飲むとき写真送ろっと（企み笑い）」

「最近、どーお？ あれから」

「あたしでよければ、話聞くけど」

「なーんか、さっきも肩ズーンって落ちてて、背中くたびれてたよー」

あなたは、最近肩こり気味だと話す。

「肩こりっていうなら、あれだ。ちょうどよかった」

「あたし、これから銭湯行くの」

「たまーに行きたくなるんだよね、おっきいお風呂」

「うん、もうほとんど手ぶらで。向こうに全部揃ってるから」

「タオルのレンタルとか、ちっちゃいシャンプー売ってたりとかね」

「知らない？ すぐそこだよ、駅の向こう側」

「一緒に行く？ いいよいいよ、行こうよ」

歩きだす二人。

「……………（ナチュラルな呼吸、十五秒ほど）」

「あっちのほうはあんまり行かないかんじ？」

「まーでもそれがいいかも」

「あっちはね、飲み屋さんが多いんだわ」

「女の子一人で夜歩くのは危ないかもー」

「あ、でもね。夜カフェできるところとかね」

「美味しいコーヒーゼリー食べれるんだよおすすめ」

「まだこの町も二年目でしょ？」

「じゃあまだ知らない場所も多いよねー」

「お気に入りの場所、いろいろあるよ。案内したいなー」

「ゆっくり知ってけばいいじゃん？」

「お、見えてきた。ほら、煙突もある」

「そうそう、あれ煙突。電車から見えたでしょ？」

「なんかこう、いい店構えだよね」

「昭和なかんじ。レトロで……」

「……駅前の開発に断固抗ってきた歴史を感じる……」

番台にはおばあちゃんが座っている。

置物のようにじっとしていて、無反応。

常連の桂花は勝手知ったる様子。

「(番台の女将へ) ばんわー」

「ほい、靴箱選んで」

「あたしはいつでもラッキー7、お気に入り」

「ここでタオル借りるの。シャンプーも買える」

「あとクレンジングと洗顔フォームは、
こだわりがなければ試供品テイクフリーだから」

「ねえ、気が利いてるう」

「お金はその箱にね」

借りた一式を持って女湯の脱衣所へ。

「（ひそひそ声で）ね、番台のおばーちゃん、置物みたいでしょ」

「（ひそひそ声で）ご覧の通り、ほぼセルフサービス状態」

「（ひそひそ声で笑い交じりに）たまにほんとに置物じゃないかなあって思う」

「ん、あれえ、すごい空いてる。いつもはもっと混むのに」

「あー、夕飯時かぁ。…お腹空いてない？」

「ん、なんか食べてきたならオッケーだね」

「あっついお湯につかる時は、お腹ぺこぺこでもなくて、
お腹いっぱいでもないときがちょうどいいんだ」

「入浴も体力使うからねえ」

「だから仕事で遅く帰ってくると、マジで嫌じゃない？
お風呂入るの。面倒で」

「ねー。わかるわー」

「毎日お風呂入って偉いよ、ほんと。えらすぎ大明神」

「あ、ロッカーはここにしよー」

服を脱ぎ始める二人。

「……んっしょ（服を脱ぐ動作に合わせた吐息）」

「……（動作に合わせた吐息）」

桂花の躊躇いない様子に、あなたも服を脱ぎ始める。

「お、いい脱ぎっぷり」

「銭湯好き？」

「好きか♪ よかった」

「うんうん、通っちゃいなよ〜いいよいいよ」

「回数券も、ちょっとお得になるやつあったよ」

「あたしも買ってる。部屋のお風呂狭いんだよね、真四角でさー」

「そのぶん家賃も安いから、まあいいんだけどね」

「のびのび足伸ばして浸かりたいときはこっちだね〜」

「……うし、行きますか」

「わあ〜、いいね。ふたりじめだ」

洗い場に二人並んで、それぞれに身体・髪を洗う。

「水圧が、家より全然強くて既に最高……」

「（鼻歌）　　〜〜〜♪」

シャワーの音にまぎれて、桂花の鼻歌が聞こえてくる。

「さっぱりしたねえ〜」

「この銭湯はねー、端っこがジェットバス」

「真ん中が普通のお湯。そっちの端が薬湯」

「今日なんの薬湯だろ。どっかに案内……」

案内書きを探す。鏡の横に貼ってあるのを見つける。

「あった」

「（案内書きを読んで）……ねえ、日本酒風呂だって！」

「まじか、そんなのあるんだ」

「（案内書きを読みつつ）近隣の酒屋さんからいただいた廃棄品を利用してます、だって」

「飲んでいいのかな？ 飲んじゃダメかあ。さすがに薄いカー」

「匂いしてた？（すすすんと匂いを嗅いで）

……あー、まあアルコールかあ」

「（笑いながら）おねーさん常にアルコールの香り纏ってるから気づかなかった」

案内書きを読む桂花。

「なんか血行促進効果あるって。肩こりに効きそ〜じゃん」

「美肌効果もあるって〜」

「（喜んで）やだー、あたしも美肌になっちゃおっかな」

「あ。注意、アレルギーをお持ちの方は入浴をお控えください」

「お子様はご遠慮ください。……だって」

「大丈夫だもんね？ うんうん、おっけ〜」

「早速入ってみる？」

「いこ〜」

湯船へ向かう。

「……んしょ（お風呂に入る息遣い）」

「（肩まで浸かりながら）あああああ〜……」

「はああー……（しみじみと吐息）」

「……（リラックスした吐息）」

「くううう〜……」

「あー、（笑って）今お酒飲んだときと同じ声出た」

「お酒は心の銭湯……ってこと？」

「で……銭湯は身体のお酒……？ ん？」

「まあいや」

「はあ〜」

伸びをする桂花。

「……（リラックスした吐息）」

「お酒を浴びるほど飲みたいとはよく思うけどさあ……」

「まさかお酒に浸かれるとはね……」

「これが……ほんとの酒浸り……？」

「……まあいいや」

「このまま溺れようかなあ……はあ……（うっとり）」

「（笑って）どうせなら飲みたいけど」

「……（伸び伸びした呼吸）」

「……」

「その後どーですか、お仕事のほうは」

「環境の変化にも慣れてきたかい？」

「懐かしいんじゃない？ 新入りのヒヨコちゃんたちの姿」

「去年は自分もこうだったなーとか」

「ねー、思うよね」

「そのときは、一年上の先輩でも頼もしく見えたんじゃない？」

「きみもさ、今のヒヨコちゃんたちから見たら

頼もしい先輩なんだと思うよ」

「しっかりしてるもんねえ」

「分かるよー。あたしの百倍しっかりしてる」

「キッチンも綺麗だったし、部屋散らかってなかったし」

「お仕事忙しいのに生活が破綻してないのはエライでしょ」

「すごいよー。ちゃんとしてるよ」

「このあいだは酔っ払いの言葉だから信用ならなかったと思うけどさ」

「あたしがきみくらいの年のときはな〜」

「もっとフラフラしていい加減だったけどなー」

「だから、すごいなーって思う」

「（笑って）まあ今もふらふらしてるのは同じかあ」

「人間わりと生きていけるからね…」

「って、わりと生きてこれたやつ言葉になっちゃうけど」

桂花、あなたに身を寄せせる。

「だからさー、もし社員が心底しんどくなったときは…」

「（耳元に囁きで）けーかさんと一緒にふらふらしようよ」

「昼間っから飲むお酒はねえ…（笑って囁く）美味しいよ」

「…（笑い交じりの吐息）」

桂花、元の距離感に戻る。

「ふい〜…」

「どう？ 血行よくなってきた？」

「ほっぺたも赤くなってる。かわいいーねえ」

「お肌は水を弾いてるし……若さだねえ」

「あやかっておこう。ありがたや、ありがたや……」

「は……（リラックスした吐息）」

「……………（静かな吐息）」

「あ……（伸びをしながら）」

「そろそろ出ようかあ」

フェードアウト

【EP04：お風呂上がりにするこゝとは】

○脱衣所

脱衣所が休憩所を兼ねています。

ロビーがないかわりに脱衣所が広め。

着替えが終わった二人。

「うー。身体ぼっかばかあ」

「本当は、しばらく全裸のままぼーっとしてたい。
今着た服もう脱ぎたい」

「自宅と比べて、銭湯の唯一のデメリットだよねえ」

「あ、お水飲もー。きみも飲みな。お風呂上がり、給水大事だよ」

「（お酒じゃないの？と聞かれ）……なに。意外そうねえ」

「さすがに風呂上がりで速攻お酒を飲むのはねー、
健康上よくないよ」

「お風呂で身体の水分けっこー抜けてるから」

「だから、まず水分補給」

「ほらそこ。ウォーターサーバー。お水もお湯も飲み放題」
「だから……」

ウォーターサーバーまで2歩ほど歩いていく桂花。

「……（水をくむ）」

「はい、どうぞ」

あなたへ紙コップを手渡す桂花。

「で、あたしも……（水をくむ）」

桂花も自分の分の水を汲み、飲む。

「……（水を飲み干して）っはー」

「いいかいお嬢ちゃん。人間、健康第一だよ」

「不健康な身体では、好き放題に飲めないからね」

「だからあたしは、健康に気遣いながら飲んだくれようと思っている」

「えらいでしょう、ふふん」

「あなたもおねーさんを見習いなさい」

「はい、じゃあ紙コップ回収します」

「肩こりはどうだい？」

「おねーさん、マッサージしてあげようか」

「まー素人マッサージですが。自分じゃできないもんね？」

「そこ、座って座って」

長椅子（すのこベンチ、背もたれナシ）に腰かけるあなた。
後ろに回った桂花、あなたの肩を揉む。

「お〜、ぽかぽか♪」

「身体の芯からあったまったよねえ」

「さて、肩こりのほうは……」

「おー……なんかたしかに、こってるこってる……」

「お仕事、デスクワークかぁ」

「一日中パソコンの画面見てお仕事するの、想像つかない」

「きみはすごいねえ、ほんと……」

「日頃のがんばりを労わって……いざ」

「……ん、しょ……よいしょ……（ゆっくりめに肩を揉む息遣い）」

「っしょ……ん……しょ……（ゆっくりめに肩を揉む息遣い）」

「……（ゆっくりめに肩を揉む息遣い）」

あなたの反応が変わるポイントを見つける桂花。
特に凝っている場所を発見した。

「お？　ここ？　ここだな？」

「ツボ、発見？　お、いい？」

「いいんだ？　おー、よしよし♪」

「（笑って）おー、いいリアクション〜」

「（耳元で）誰もいないから、声我慢しなくてもいいよ？」

「（耳元で）どーお？　気持ちいい？」

「（耳元で笑いながら）ん、よかったよかった」

「（笑いながら）ねえちょっと、おねーさんドキドキしてきたんだけど」

「なんかねえ……いけないことしてる気持ちになる」

「……（笑う）」

「次はちょっと、トントン叩いてみよっかなー」

「ん、ん……（あなたの肩を叩く息遣い）」

「こっちも……トントン……トントン……」

「……（あなたの肩や背中を叩く息遣い）」

「んで、最後にまた肩を揉みましょー」

「……（あなたの肩を揉む息遣い）」

「……ぽかぽかしてきた？」

「コリがほぐれて、血行がよくなってきたんだね」

「血行が、結構よくなってきたんだよ（ダジャレ）」

「（笑いを堪えつつ）……もー、これ今日一日

ずーっとこの我慢してたんだけど」

「寒くなってきた？ もっかいお風呂入る？ あはは」

「（あなたの肩を揉みながら）血行が結構、よく、なって、きたー」

じわじわきて笑うあなた。

「このくらいのダジャレで笑ってくれるの、きみくらいだな」

「おねーさんを甘やかすのよくないぞー。つけあがるぞー」

「じゃあ、もすこしオマケに肩もみ延長してあげよーっと」

「……（肩を揉む息遣い。アドリブ。楽しそう）」

「いつもがんばっててえらいえらい……」

「この肩こりはその証だねえ……」

「……（肩を揉む息遣い。アドリブ。楽しそう）」

「よっし、おしまい」

「またひどくなったときはおねーさんが手を貸しましょう」

「ぜひとも、遠慮なく頼ってちょーだい？」

「連絡先も交換したことだし、ね」

「……さて、お待ちかねですよ。お嬢さん」

勿体つけて楽しげな桂花。

「お風呂上がりのぽかぽかボディが何を求めているか分かりますか」

「そこの自販機で何が売ってるかお気づきですか」

「コーヒー牛乳、フルーツ牛乳……」

「まあ定番ですね、悪くないでしょう」

「やや、あれはなんだ？ あの輝くメタリックな缶は？」

「お——お酒だぁー！」

「へっへっへ……」

「はい、どーぞ」

桂花、あなたの隣に腰かける。

「……(座る)」

「では、かんぱいっ」

「んくっ、んく……(お酒を飲む)」

「ぷはあ〜……!」

「おーいしーい♪」

「……(お酒を飲む)」

「はあ……癒しが全神経に行き届いてる」

「……(お酒を飲む)」

「……(発見したように) 熱いお湯に身体を浸すと、お酒が美味しい」

「(酔ってふわふわになりつつ)」

すべてはこのために用意された儀式だったんだよなあ……」

あなたに身体をもたれる桂花。

「はあ……最高だねえ……」

「……(お酒を飲む)」

「……(吐息)」

「……しあわせ〜」

「……(吐息)」

「……（残りを飲み干して）はあ〜っ」

「……（落ち着いた、満足そうな吐息）」

「……（ぽつりと）やっぱ日本酒も飲みたいな」

桂花のつぶやきにあなたも同調する。

「っしや、飲みにいけますか」

立ち上がる二人。玄関へ向かう。

【EP05：こたつとお鍋と寝息といびき】

○あなたの部屋・キッチン

銭湯から一ヶ月ほど経過。

今日は月末、給料日後の土曜日の夜。

キッチンに立ち、鍋を作っているあなた。
鍋に桂花を誘い、到着を待っている。

コンロの火力を調整し、弱火にする。

玄関を開け、桂花を招くあなた。

桂花は飲み場から抜け出してあなたの部屋へやってきた。
そのため、すでにアルコールを含んでいる。

「やゝ。桂花さんだよ」

「お邪魔します。あ、いい匂い〜」

「誘ってくれてありがとうー。連絡くれて嬉しかったよ〜」

「だいじょぶだいじょぶ、今日やった飲み会は職場のやつ」

「うん。ゆるゆるのやつ」

「自由参加だし途中抜け〇スだしいつもやってるし」

「桂花さんとしては、きみに呼ばれたらいつでも飛んできちゃうからね」

「お鍋もあるし♪」

「……もうできちゃった?」

あと少し、と答えるあなた。

「じゃ、これ追加していい？」

靴を脱ぎ、廊下にかかる桂花。

「きのこ好きなんだ。舞茸と、エリンギ」

「それともちろん、お酒もね。冷蔵庫借りるよー」

桂花、冷蔵庫へ歩いていく。

「お、桜チューハイ、まだ取っといってくれてたんだ！」

「嬉しいなあ。今日はまずこれ飲もうっと」

「きみはどれ飲む？ このおしゃれビール？ 瓶のやつ」

「おっけー、手前に置いとこ」

「……（缶を冷蔵庫に入れる）」

「手洗うのってこっちの部屋？ りょーかい」

ドアは開けたまま、洗面所で手を洗う桂花。

「よーし。ではでは、キッチンにお邪魔いたします」

「石づき取るだけ」

「舞茸はこのまま入れちゃって、エリンギはちょっと割く」

「（茸を入れながら）あー、既においしそうだ。……よーし」

「いいねえ」

「お鍋ってやっぱりオールシーズンやるべきじゃない？」

「手軽で美味しいし。夏でもやればいいよね」

「うん。汗かきながらさ、必死で食べるの」

「それはそれで気持ちよさそうだし、
お酒も美味しそーだし（笑う）」

「……火が通るの、もうちょっとだねえ」

「じゃあ、完成を待つあいだに……」

「お先に乾杯しちゃいますか」

桂花はポケットから鍵を取り出す。
キーホルダーのマイ栓抜きを使って、瓶ビールを開封する。

「これ見て見て、あたしのマイ栓抜き」

「キーホルダーなの。ちっちゃくてカワイイでしょ」

「部屋の鍵につけとけば肌身離さず持って歩くじゃん？」

「そうするとね、諦めなくていいからね」

「『あ、これ瓶じゃん、ちょっとやめとこ』ってならない」

「大人になったら、必要だと思うよ」

「いつ瓶ビール飲みたくなるかわかんないもん」

「つまり、飲みたい酒を諦めないという心……」

「などと要らん話を聞かせてしまいました、いざ謹んで」

「（栓を抜きながら）よ、っと……は〜いお待ちどおさま」

「ではこちらも」

「（笑って）……カンパイ」

「……（お酒を飲む）」

「（しみじみと）はあ〜」

「あれだね、きみは、一週間お疲れさまだったね」

「一か月か。昨日給料日？」

「今月もがんばったねえ〜。さあ、飲め飲めー」

「……（お酒を飲む）」

「はー（嬉しそうに息をつく）」

「……（まったりと吐息）」

「んー、あたしのほうはねー……忙しくはなかったねえ」

「新人歓迎とか、送別会とか、そういうのも落ち着いたからねえ」

「……（お酒を飲む）」

「……お、鍋もういいかんじじゃない？」

「おー、いいかんじ」

「運びましょうかね」

「鍋つかみ借りますよー。先に鍋敷きスタンバイ頼みます」

あなたは先に居間に入り、鍋敷きをこたつにセッティング。

「(鍋を持ち上げて) よいしょっ……」

鍋を居間へ運ぶ。

「そーっとね」

土鍋の余熱効果で、以降もしばらく鍋の音、

グツグツ↓コトコトと続く。

「(歓声を上げて) いいじゃん」

お酒を取りに行く。鍋の蓋をキッチンに置く等。

「……よーし」

こたつに落ち着く二人。

「それじゃあ、いただきます」

「作ってくれてありがとねえ」

「では好物からいただきますね。まず肉。豚バラ、最高」

「そして大根。白菜。相性いいのよねこのひとたち」

「豚とは血の繋がってない家族みたいなものだから」

「舞茸もお椀にお招きしておこう……」

「あむ、(咀嚼して) んんん、んま……」

「(咀嚼、嚥下して) はあ……」

「ひとに料理してもらうのって嬉しいねえ」

「はー……（咀嚼、嚥下。食事を楽しむ吐息）」

「こんどは桂花さんにもなにか作らしてよ」

「けーかさんは料理うまいんだからねー」

「調理のバイトも経験したし」

「得意料理はね……ん〜」

「最近作りまくってるのは、豚のにんにく焼き」

「……（お酒を飲む）」

「しょうが焼きのにんにく版ね。

疲れにも効く。おいしいよ〜」

食べてみたい、と食いつくあなた。

「いいよー。こんどはうちにも遊びに来て……」

「と言いたいけど……」

「部屋は……片付いてたことないからなー」

「部屋っていうか巢」

「（片付けようかというあなたへ）いや、片付けなんてだめだめ」

「綺麗にしないで。あたしに住みやすい環境なの、今」

「それに、きみの時間はきみのために、有意義に使ってほしいの」

「なので、まあ足の踏み場はないかもしれませんが、

よければお越しく下さい」

「（笑って）ソファは座れるようにしとくね。頑張る」

「頑張らないと無理だねえ」

「……（具を取る）」

桂花、腕に具材を追加する。

かわりばんこであなたも具をとる。

「……（食事をする息遣い。楽しげ）」

「……（お酒を飲み切る）、あ。飲み切っちゃった」

「とってくる。きみは……まだか」

「うんうん、自分のペースで楽しく飲もう」

「よいしょっと（こたつを出る）」

キッチンへ向かい、冷蔵庫からお酒を持ってくる桂花。
こたつに戻る。

「（こたつに入りながら）いよゝいしょっと」

桂花、酔っぱらってくる。

「……（飲んで、息をつく）」

「はー……（まったりと息をつく）」

「……（鍋から具を取りつつ）食べもの、なにが一番好き？」

「桂花さんはー、お酒が好きー（笑う）」

「（ご機嫌に笑って）きみのことも好き。ほんとほんと」

「（話題を戻して）食べものの話ね」

「えーとねー、あたしはねー、串カツ」

「あと焼き鳥。煮卵。あ、厚揚げもいいなあ……」

「（笑い交じりに）なんか飲み屋で注文してるみたいになっちゃったな？」

「……（飲んで、息をつく）」

「ふい〜……」

「……それで、きみは？好きな食べ物」

「えー、なに。なに照れてるの」

好きな食べ物を答えるあなた。

桂花、食事を続けながらあなたとの会話を楽しんでいる。

「からあげ？ けーかさんも好きー」

「いいじゃん。なんで恥ずかしがってるの」

「からあげ嫌いな人間は、なかなかいないでしょ」

「……（食べるアドリブ）」

「からあげって一口にいつてもさ、色々あるわけで」

「衣とか、肉の部位とかさ」

「単純じゃないよお。ねえ？」

「……実は桂花さんの得意料理は、からあげなのだ」

「鶏だけじゃなくて、タマネギとか……」

「なんか、気が向いたやつはだいたい衣まぶして揚げる」

「衣をまぶして揚げるとき、食材ども、
誰しも性格が変わるじゃないですか」

「アツアツの油に浸ってさ……銭湯に浸かったかんじでさ」

「どうにでもなうれってなるのかなあ」

「……（食べるアドリブ）」

「ん？ なんの話だこれ？」

「……ふふ。酔ってるよー。君と飲むお酒は美味しいから」

「……（嬉しそうに笑う）」

「……（食べるアドリブ）」

「じゃーさ、うちにきたときはからあげ作るね」

「まっかせなさいって」

「……（お酒を飲む）」

「……（無言だが上機嫌な息遣い）」

食事を続ける二人。

「お豆腐もらおうと」

「（息を吹きかけて冷ます）ふー、ふー」

「……（豆腐を食べて）……あちあち……、……んま……」

「……はぁ（満足）」

「……(食事を続ける息遣い)」

「……(お酒を飲む)」

「はふー……」

「……しあわせ」

あなたがお酒を飲み切ったのに気付く桂花

「お。なんか取ってくる？」

「いいのー？ はい、桂花さんはこたつでお留守番ね」

あなたはこたつを抜け、キッチンへ向かう。

冷蔵庫を開け、お酒を選び、居間へ戻ってくる。

「おかえりー」

「栓抜き使ってみる？ ほれ」

桂花から栓抜きのキーホルダーを受け取るあなた。
瓶ビールの栓抜きをする。

「どーぞどーぞ」

「がんばれ〜」

「お、できたね。ちょっと使いにくいでしょ。ちっちゃいからねー」

「あたしにもそれちょうだい？ 久々に飲むー」

「……(瓶ビールを飲む)」

「はうあー、おしゃれ味。おいし」

「はー……」

「……わりともう、お腹満足だあ」

「ごちそーさまでした」

「……ふう（眠気が滲む吐息）」

桂花、だんだんと眠気が湧いてくる。
喋り方も酔いと眠気で緩慢に。

「あー……こたつもぬくぬく気持ちいいし……」

「これ、いつまで出してる予定？ 万年こたつ？」

「夏でもこたつにはいりたいなあ……」

「クーラーががんがつけてさあ……贅沢に」

「……もぐっちゃおー」

「あー……こたつに食べられるう」

「きみもこっちきて一緒にもぐろう」

桂花に誘われ、桂花の隣にもぐりこむあなた。

「（吐息で笑いつつ）……きたきた♪」

「これなら足がぶつからずに済みますね」

「はあ、ぬくい……」

「おなかも、いっぱい……」

「極楽だねえ……（あくびをする）」

「……（深くゆっくりとした吐息）」

「……（入眠の吐息）」

眠りに落ちる桂花。

「……（軽くいびき交じりの寝息、十五秒ほど）」

「……（静かな寝息、続く）」

フェードアウト。

【EP06：乾杯、ふたりで、桜の下で】

○あなたの部屋

鍋を食べたあと、寝落ちしていた二人。

「……（寝息）」

目を覚ます桂花。

寝起きのダウンナーな雰囲気で、喋り方もぼそぼそ。

「……んあ」

「ふあ……（あくび）あー……」

「やば。寝落ちしてた……」

すぐ隣にあなたがいる。

気付いて、心底びっくりするも静かに驚く桂花。

「……うわ……びっくりしたあ……」

すぐそばにいる相手にだけ伝える、ひそひそ声の会話。

「いやあ……ふふふ……（照れ笑い）」

「この部屋は居心地がいいねえ……」

「うん。こたつの引力もすごい……」

「この世の極楽じゃあ……」

「んんん〜……（こたつに入ったまま伸びをする）はぁ……」

「いやー……水飲まないとやばいぞ……」

「……よっし」

こたつを抜け、キッチンへ向かう桂花。

キッチンから、こたつにいるあなたへ声をかける。

「コップ借りますよー」

キッチンの収納を開け閉めする。

コップ2つに水を汲んで戻ってくる。

「はい、どーぞ」

桂花からコップを受け取るあなた。

「酔っ払いのコタツ寝落ちは、最悪の場合、命を落とすので」

「水分補給は大事」

「……（水をぐびぐび飲んで）ぷはぁ」

「はー……染み渡ってるねえ……」

「ちょっと外の空気吸いにいく?」

「お散歩しよーよ」

ふたり、出かける支度。

あなたは上着を着て、一緒に玄関へ向かう。

「んしょ……（玄関で靴を履く）」

「まだちょっと寒いか? 深夜だもんね」

「はあく……（深呼吸）」

「ん〜。空気つめたくてきもちい」

「桜見に行く？ 駅のホームから見えるやつ」

「じゃ、出発」

駅へ向かって歩きだす二人。

周囲は静かな住宅街で、喋るときは声を潜める。

「……（ナチュラルな吐息）」

「あー……風きもちいい」

「顔が熱いのかな。手は冷たい」

「手が冷たくていいきもち……」

「ほら、きみも」

桂花、あなたのほっぺに手のひらをあてる。

「きみのほっぺも、ぽっかぽかだあ」

歩き続ける二人。

「……」

「……あ、見て、あの窓」

「猫」

「そこ、そこ」

「出窓からこっち見てる〜」

「ふふ……でっかい猫」

「かゝわい」

「……（散歩を楽しむ吐息）」

「お。もう駅見えてきた。近い」

「駅近、だいじだいじ」

「あたしの家はもっと向こうー。
言っておくけど、ぼろいよ」

「（笑って）覚悟の上、お越しく下さい」

「さて、桜の下までご案内」

駅舎に沿って歩く二人。

「ホームの端っこのほうね」

ホームの上、二人が出会ったベンチが見える。

「あ。あのベンチ、あたしたちがはじめて一緒に飲んだところ」

「桜のお酒、今んとこあの自販機でしか見たことないんだよね……」

「……お。到着」

「ほら。桜の下にベンチがあっさき、
気が利いてるよね」

「毛虫に注意した方がいいけど、まーだいじょぶでしょう」

「で、気が利いてるのはベンチだけじゃない」

「ほらそこ。お酒の、自動、販売機っ♪」

「何買う？ 何買う？」

「あっ、桜のお酒あるっ。あたしこれにしーよおっと」

「きみも？ おっけーい」

桂花、あなたに缶を渡す。

ふたりでベンチに並んで座る。

見上げると、頭上いっぱい桜の眺め。

「ベンチ、お尻ちょっと冷たいね。へーき？」

「あたしもへーき」

「ふう……」

缶を持ったまま、まだ開けない桂花。
二人で桜を見上げている。

「……いい眺めだあ」

「ちょこちょこ葉桜だね」

「緑も、なんかアクセント？ いいよね」

「ピンク一色も好きだけど、こっちも好きだなあ」

「……」

「きみは好き？」

「あたしも好き（微笑む）」

「（以降、親密な距離感で）……なーに？ なんか聞きたそうな顔」

「（あなたの話を聞いて）んー、あたしはきみを甘やかしているつもりはないけど……」

「甘やかしてるかなあ？」

「むしろ、あたしのほうが甘えてるような」

「まあ、なんか構っちゃうのは確かにね……」

「目を離したくないというか。構いたいし構われたというか」

「それはまー、あれだねー……」

「きみのことを好きになったから」

「（聞き返してきたあなたへ）……そう、好き」

「……手を繋ぎたいとか、キスしたいとか、できる限りの時間一緒に過ごしたいっていう、好き」

「会えないときは、きみのことばっか考えちゃう、の好き」

「いっぱい連絡しすぎたらうざいかな？」

「って、スマホ握りしめて悩んじゃうような、好き」

「……きみと飲むお酒が、人生でいちばんおいしいなあっていう、好き」

「（苦笑寄りの微笑みで）……酔っぱらってないよ」

「（囁き声で）お嬢ちゃんは？ 酔っぱらってない？」

「（あなたの答えを聞いて）……ほんと？」

「恋人になってもいいの？」

「（胸に手を当てて、真面目腐って）はい。度を越した飲酒を控えます」

「万がどうしてもってときは、
あなたと一緒に度を越したいと思います」

「末永く飲み続けるために、身体を壊さないことを誓います」

「……（笑いあう）」

「（笑って）……じゃ、これからもよろしくね」

「……今から飲むお酒、人生でいちばんおいしい予感がある」

「……かんぱいっ」

「……（飲んで、一息つく）」

「はあ……おいし」

「……（お酒を飲む）」

フェードアウト

【おまけトラック…あいしゅ。】

○あなたの部屋…キッチン

交際が始まってからの二人。

夜。あなたに頼まれて買い出しに行っていた桂花が戻ってくる。

二人はすでに飲酒をしていて、ほろ酔い。

合鍵であなたの家へ入ってくる桂花。

「ただいまー。おつかい、遂行して参りました」

「おつまみと、追加のお酒と、明日の朝ごはんと……」

「適当にいれちゃうよーん」

「あと、これは桂花さんのおすすめ」

「いちごアイス」

「ポン酒に合うんだよお。知ってた？」

「食後のデザートにちょうどいいなと思って」

「食べる？ でしょ？」

「（頷いたあなたへ）だよね」

キッチンでデザートを用意する桂花。

「アイスをね、いいかんじの器にいれまして……」

「お次は、お酒を適量注ぎまして……」

「お、おっととと……入れすぎた。飲んじゃお」

「……（器の縁に口をつけ、お酒をすする）」

「これで『あいしゅ』のできあがり〜」

「はい、どーぞ〜」

コタツのあなたの隣に入る桂花。
器を差し出す。

「あいしゅ。……アイスとお酒の、『あいしゅ』」

「え、急な赤ちゃんプレイって思った？」

「桂花さんはねえ、甘えるよりも、
甘やかしたいおねーさんなんですよ」

「ほらほら、あーんして、あーん」

アイスを食べさせてくれる桂花。

「（あなたの口へ運んで）あーん」

「どー?」

「おいし? どれどれ私も……」

同じスプーンで食べる桂花。

「（一口食べて）んんん……！ つめたっ」

「美味しい〜」

「なんか大人っぽいオシャレな味が……しない？ 気のせい？」

「（あなたに食べさせて）はい、あーん」

「（上機嫌に笑う）ふふふふ〜」

「しかし……あれだな。ちよっち……酒、足りないな」

キッチンへ向かい、日本酒を取ってくる桂花。

あなたの隣に座る。

「よし」

「……（器からお酒を啜り、飲む）」

「（息を吐いて）ん〜……ほのかに苺のかおり」

「おいしいよ〜。ほら」

あなたに差し出す。

「……ふふ」

「あいしゅ、おいしいねえ」

「ほれ、アイスも。あーん」

「……あたしも〜（アイスを食べる）」

「……（微笑む）」

器にお酒を注ぎ、飲む。

「……（飲む）」

「ふはあく……」

「……ふふふー（ご機嫌に笑う）」

酔っ払いのテンポで、ふわふわなかんじに喋る桂花。

「まわってきましたね。けーかさん」

「まわりやすいので、日本酒はときどきしか飲まないんだけど…」

「ひさびさに飲みました」

「きみと飲んでると、余計に酔うの早い気がする」

「……楽しくて」

「……（お酒を飲んで）おいし」

「つべたい。唇が」

「ほら。手貸して」

「……ちゅ」

あなたの手のひらにキスをする桂花。

「ねー？ 冷たいでしょ」

「……（微笑む）」

「きみも飲む？ あいしゅ」

「どうぞどうぞ」

「ささ、ぐいっと」

「……お、いい飲みっぷり」

「あたしもー」

「……（ぐいっと飲む）」

「ふいー……」

「（キスしたい気持ちで見つめる）……」

「（あなたの頬に）……ちゅ」

「（囁き声で）冷たい？ ねー」

「（囁き、微笑み）きもちー……」

「（頬に）……ちゅ。ちゅ」

「……（照れて微笑む）」

「はぁ……」

「好き〜」

「……ちゅっ」

「(唇に口づけて)ん……」

「……(静かに笑う)」

「すき」

「……(笑う)」

「あ……ふわふわしてきた」

「(あなたの提案に、照れつつ喜ぶ)えー？」

「ひざまくらー? いいのー?」

「じゃあ、お邪魔しまゝす……」

「ごろん」と

あなたの膝に頭を載せる桂花。

「うわー……これ……イイ」

「はあ……(堪能する吐息)」

「……甘えるのも悪くないな」

「きみは、おねーさんを甘やかすのが上手いのかもね」

「……(満足の吐息)」

「(噛みしめて)……悪くないな」

「はあ……」

「……………（笑う）」

「……………（リラックスした吐息。笑い交じり）」

「はぁ……………」

「さいこーだぁ……………」

「……………」